

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：13103  
研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2017～2021  
課題番号：17K13929  
研究課題名（和文）薬物事犯に対する治療プログラムの長期的な効果の検証と再犯予防の要因に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Long-Term Effectiveness of Treatment Programs and Factors in the Prevention of Recidivism for Drug Offenders

研究代表者  
大宮 宗一郎 (Omiya, Soichiro)  
上越教育大学・大学院学校教育研究科・講師

研究者番号：50729283  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、薬物依存回復プログラムの長期的な効果について調査を行い、研究から得られた知見を踏まえて、薬物依存回復プログラムを策定した。薬物使用者のなかには、薬物使用している自分を否定していることが明らかになった。そこで、親しい友人に接するように自分に接し、自分に対して向ける思いやりであるセルフ・コンパッションを高めるためのプログラムを作成した。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、薬物依存の回復支援における支援者の関わり方が明らかになった。特に、自分に対して思いやりをもって接するというセルフ・コンパッションに注目した支援法については、実際の支援現場で使用されているテキストに反映された。したがって、本研究は、薬物使用・依存からの回復プログラムの策定に寄与したといえる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the long-term effects of a substance use recovery program and developed a recovery program based on these findings. This studies was found that some drug users were denying their selves because of their drug use. Therefore, a program was developed to increase self-compassion, which is the compassion that one directs toward oneself by treating oneself as one would treat a close friend.

研究分野：薬物依存、学校メンタルヘルス

キーワード：薬物依存 薬物依存回復プログラム 質的調査 セルフ・コンパッション

## 1. 研究開始当初の背景

2013年に日本の刑事施設に収容されていた男性受刑者の25.1%、女性の38.3%は、覚醒剤事犯者であり、例年通り、男女ともに窃盗に次いで2番目に多い割合を占めていた。また、覚醒剤事犯者の同一罪名再犯者率は63.8%であり、増加の一途を辿っている(法務総合研究所, 2014)。薬物事犯者は、慢性疾患である薬物依存症を罹患した「依存症者」と「犯罪者」の2つの側面を持っている。前者の側面に焦点を当てれば、薬物事犯者に対して継続的な支援を提供することが必要になるが、わが国では、薬物依存症を「疾患」ではなく「犯罪」と捉え(松本, 2012)、治療よりも矯正することが優先されてきた。薬物事犯者は、刑事施設に収容されることで物理的に薬物は使用できなくなるが、依存症という疾患への支援が提供されるわけではない。このような状況に対応するために、2005年の監獄法改正に伴って薬物事犯者に対する治療プログラムの実施が義務づけられた。

薬物使用者は、継続的な支援を受けることが重要であるとされるが、刑事施設の限られた人的資源や運営体制を考慮すると、薬物使用問題からの回復に必要な継続的な支援を実施することは難しい現状がある。その一方で、薬物事犯者の再使用リスクが最も高まる時期の1つが出所直後であることが臨床現場で知られていることを踏まえると、出所直前の釈放前教育などでフォローアップ・プログラムを提供することが現実的であると考えられる。このようなフォローアップ・プログラムの提供は、刑事施設内で提供されるプログラムの効果を維持させるのと同時に、薬物事犯者の円滑な社会内処遇への移行に寄与すると考えられる。しかし、このようなフォローアップ・プログラムの必要性を裏付けるエビデンスはない。

## 2. 研究の目的

本研究は、刑事施設内における薬物依存回復プログラムの長期的な効果を検証することを目的としていた。しかし、刑事施設の体制の変化から調査が実施できなくなった。そのため、独立行政法人日本学術振興会研究事業部に問い合わせて、調査対象施設が変更可能であることを確認した上で、調査施設を精神保健福祉センターに変更した。また、研究期間中は、COVID-19の世界的な感染拡大も生じていたことから研究内容を変更し、長期間にわたってプログラムを提供することの意義を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### 研究1 文献調査

日本で薬物事犯者および薬物使用者を対象に提供されている薬物再乱用防止プログラムの効果を検討している文献調査を行う。

### 研究2 インタビュー調査

薬物依存回復プログラムの参加者2名を対象にプログラムに長期的に参加することの意義や、長期間にわたってプログラムに参加する中で感じたプログラムの改善点等についてのインタビュー調査を行った。

### 研究3 セルフ・コンパッションとマインドフル・セルフ・コンパッションの調査研究

臨床現場では、薬物使用者は、薬物を使用した自分や薬物を止めることができない自分を責める傾向にあることが知られている。そこで、「辛い時や失敗した時、あるいは自分の気に入らない部分に気づいた時などの困難な状況に直面した時に、親しい友人に接するように自分自身を理解し、サポートを行う」セルフ・コンパッションと、セルフ・コンパッションを高めるプログラムであるマインドフル・セルフ・コンパッション（以下、MSC）の調査研究を行った。

#### 研究4．薬物依存回復プログラムの制作と社会実装

文献調査の結果およびインタビュー調査の結果を踏まえてプログラムを作成する。

### 4．研究成果

#### 研究1 文献調査

日本では、米国の西海岸を中心に発展してきた統合的外来用再乱用防止プログラム「Matrix model」を基に開発した SMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program) および、SMARPP 類縁プログラム (SMARPP 内容を踏襲しながら、各地域やプログラム実施機関の実情に即して工夫が施されたプログラム) が全国的に広まり、刑事施設、医療機関、福祉機関、民間リハビリ施設 (DARC) 等で用いられていた。SMARPP および SMARPP 類縁プログラムの効果を検証している査読付論文を Ichushi, Cinii article、および Pubmed の検索エンジンを使用して検索したところ、11 本の論文が抽出された。いずれの論文においても、薬物依存に対する問題意識と治療に対する動機づけ、および薬物の欲求が生じた際に対処する自信または自己効力感の程度の変化がプログラムの効果の指標として使用されており、プログラムの前後で統計的に有意に上昇しており、SMARPP および SMARPP 類縁プログラムを実施することで、薬物依存に対する問題意識と治療に対する動機づけ、および薬物の欲求が生じた際に対処する自信または自己効力感に肯定的な変化が生じることが示唆された。

#### 2．インタビュー調査

精神保健福祉センターで提供する SMARPP 類縁プログラムに 3 年以上にわたって参加している男性 2 名を対象にインタビュー調査を行った。その結果、犯罪者としてではなく、治療を要する依存症者として対応されることや、回復することを強要されずにプログラムに参加できていたことがプログラムに参加するモチベーションにつながっていたことが明らかになった。また、他の参加者の話を聴く中で、薬物関連問題に悩んでいることが自分だけではないことを知り、不必要に自分を否定したり、責めたりすることが減ったほか、断薬のヒントを得たり、さまざまな気づきを得ていることが明らかになった。

#### 3．研究3 セルフ・コンパッションとマインドフル・セルフ・コンパッションの調査研究

セルフ・コンパッションと MSC の文献調査に加えて、セルフ・コンパッション研究の第一人者である Neff 氏と、Neff とともに MSC を開発した Germer 氏との現地調査を行い、日本の薬物使用者を対象とした relapse prevention program にセルフ・コンパッションの要素を取り入れることの有用性を明らかにした。

#### 4. セルフ・コンパッションを取り入れた薬物依存回復プログラムの制作と社会実装

千葉県精神保健福祉センターで実施されている SMARPP 類縁プログラム CHANCE の最終回に、セルフ・コンパッションを高めるセッションを組み込み、2022 年 4 月より実施されている。

#### 結論

薬物再乱用防止プログラムの効果およびプログラム提供時のポイントが示唆された。また、薬物使用者が、自分を否定してしまいがちな点については、セルフ・コンパッションを高めることが有用であることが示唆されるとともに、セルフ・コンパッションを取り入れたプログラムが開発され、社会実装された。

#### 引用文献

法務総合研究所 (2014). 犯罪白書

松本俊彦 (2012). 薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」 司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して. 精神医学 54 (11), 1103-1110.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Soichiro OMIYA , Taichi OKUMURA, Sou KIKUCHI, Yuko TANIBUCHI, Toshihiko MATSUMOTO
2. 発表標題 Meta-analysis of SMARPP; the relapse prevention program in Japan.
3. 学会等名 2022 International association of forensic mental healths services conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------